

第1部創作昔ばなし

佳作

ウソつき安兵衛の日記

安沢幸二

むかしむかしのことであります。

山奥の小さな村に、安兵衛という青年が暮らしておりました。目のたれた、まじめで分けへだてのない心のやさしい青年でありました。ところが、どういうわけか、安兵衛は村の人たちからひどく嫌われておりました。村の人たちが言うには、安兵衛はいつもウソをつき、村人たちを困らせているというのであります。しかし、当の安兵衛は、まったくもってウソをついているつもりはありませんでした。ならば、いったいなぜ、安兵衛が村人たちからウソつき呼ばわりされているのかと言いますと、それは安兵衛が本当のことを言うこと、まるつきり反対の出来事が起こるからでありました。たとえば、イノシシが村人の畑を荒らしている光景を見た安兵衛が、親切に村人に向かって、

「おい！ イノシシがそっちの畑を荒らしているぞー！」
と、さげびますと、村人がイノシシに気づく前にいつの

間にかその場からいなくなっていたり、またあるときは、村へ迷いこんだクマを見かけた安兵衛が、

「クマがあらわれたぞー！逃げるー！」

と、走りながら必死で村中へ知らせますと、とつぜんクマがくるりと村から引き返したり。こんなふうには、安兵衛が親切心から本当のことを言うと、そのすぐ後に事実とは反対の事が起こってしまうのであります。はじめのうちは、村人たちは安兵衛を許していましたが、あまりにも同じことがくり返されると、いい加減うんざりするというもの。やがて安兵衛は、村人たちから信じてもらえないどころか、「アイツはああ見えて、生粋のウソつきだ」と、後指をさされるようになり、ほとんど口もきいてくれなくなったのであります。

「どうしておいらがウソつきなんだべ。ほんで、どうしておいらが本当のことを言うと、いつもいつも反対のことになってしまうんだべ……」

安兵衛は、ほとほと疲れ果てておりましたけれど、このまま村人たちから信じてもらえないままでは、安兵衛とてやりきれません。そこで安兵衛は、日記をつけることにしたのであります。

「おいらが、日記をつけたら、みんなおいらが本当のことを言っていたんだと信じてくれるべ。今すぐに信じてくれなく

ても、いつの日かわかってくれるべや」

安兵衛は、その日に起こったことを、くる日もくる日も日記に書き記しました。そして、畑へ行くにしても、川へ行くにしても、何をするにも日記を持ち歩くようになったのであります。ところが：

「おい安兵衛、なにをコソコソ書いているか知らんが、おまえさんがウソつきなのはかわりねえべ」

「そうだべ。おまえさんのウソのせいで、おいらたちはえらい迷惑してるんだべ」

誰もかれも、こぞつて安兵衛のことを悪く言うのでありました。

「おいらウソつきじゃねえべ。これを見てみるべ」

安兵衛は、村人たちから悪口を言われるたびに日記を差しました。そこには、その日に起こったことがウソいつわりなく書かれておりました。サルが畑の野菜を盗んでいたこと、シカが果物を食べあさっていたこと…。安兵衛は一つひとつの出来事をしていねいに記しておりました。けれど、それでもやっぱり日記に記した直後には、サルやシカはいなくなってしまうのでありました。そして、何より、村人たちも安兵衛のことを信じませんでした。

「こんなもの、まがい物にきまつてるべや！」

「日記にまでウソを書いているべか！あきれるべ！」

と、言われてしまう始末でありました。しかし、いったいどののだが、自分の日記にわざわざウソいつわりのことなど書き残すのでありましょう。村人たちから心ない言葉をあびせられるたびに、安兵衛はただただ悲しくなって、家にふさぎ込んでしまうのでありました。

そんなある日、村長の娘が不治の病氣にかかったと村中が大きなざわぎになりました。心のやさしい安兵衛は、もう居てもたつてもいられず、嫌がられることを知りながら、すぐさま村長の家へ向かいました。たくさんの村人たちが村長と娘を心配して、家におとずれていました。安兵衛がどうにか村人をかきわけ、おずおずと村長に話しかけると、村長はけわしい顔つきで安兵衛をにらみました。安兵衛は、心苦しいのをグツとこらえました。

「あ、あの…おいらに何ができるってわけでもないですが、その、娘さまが治ることを、毎日神さまにお祈りしますだ。その…」

「何しに来たのじゃ。こんなときに、おまえさんのウソなど聞きとうないんじやが」

「こ、こんなときにウソなんか…」

「ワシの大事な娘のためを思うなら、帰ってくれんかの」

安兵衛はこれを聞くと、もう何も言えませんでした。ただただ、肩をおとしてうつむき、とぼとぼと家へと帰ったのであります。

明くる日も、次の日もまたその次の日も、安兵衛は村長の娘が治るようにと祈りました。けれど、村長の娘は、いっこうに良くなる気配がありませんでした。

ある日、安兵衛は、何気なく日記を見返して考えました。

「おいらの言うたこと、書いたこと、ぜんぶ反対のことが起こるんなら、こう書いたらええんでねえべか」

【村長の娘は、きっと治らない】

安兵衛は、自分の思っていること、感じていることとまったく反対のことを書きました。

「これで村長の娘が治ってくれるなら、おいらこんなにうれしいことはないべや」

そして安兵衛は、祈るような気持ちで日記をとじたのであります。

次の日の朝。安兵衛は村の米屋へ出かけました。

「おやっさん、米を1俵買いにきたべや」

米家の主人は、ぶつきらぼうに言いました。

「なんでえ、おめえさんかい。ほら、そこにあるもん取って

きな」

安兵衛は言われるがままに銭を払い、米俵を背負いました。

すると、そのはずみで、バサつと風呂敷から安兵衛の日記が地べたに落ち、きのう書いたページがひらかれました。米家の主人は、それをはつきりと見てしまいました。

「おめえ…なんちゆうことを…！」

「こ、これはちげえんです。わ、わけがあるんです…！」

安兵衛は、必死の思いでわけを話しましたが、米家の主人は、まるで聞く耳を持ちませんでした。

「おめえみたいなやつは、二度と口を聞いてやるものか！村長に知らせてやる！」

そして、安兵衛の日記は、あつという間に村中に知れわたったのであります。もちろん、村長や村人たちの怒りはとんでもないもので、安兵衛はどうとう村から追い出されてしまったのであります。

そして、その日以来、不思議なことに村長の娘の病が目に見えてよくなっていったのであります。はじめのうち、誰もがウソつき安兵衛がいなくなったからだと思ひ喜びました。けれども一方で、何やら不穏なこともたびたび起こるようになりました。イノシシが畑を荒らすようになったり、クマが

村へ迷い込んだり、サルが野菜を盗んでいるのを何度も目にしたり…。村人は、はてどうしたものかと困りました。このままでは町へ売るものがなくなり、生活ができなくなってしまうからです。

いったいなぜ、安兵衛がいなくなった日から、動物たちが里へあらわれるようになったのか、村人たちは安兵衛が動物たちを手なずけていたのではないかと考えました。しかし、当の安兵衛が村を出ていったのではたしかめようがありません。

村人たちは途方に暮れたまま、一つの季節がめぐったのであります。

冬のある日、村長は安兵衛の家におとずれました。安兵衛の家を売り払おうと思ったのです。

村長が家の中に入りますと、居間の机の上に、一冊の日記が置かれてありました。

「やれやれ、安兵衛め。日記なぞ置いていきおって」

村長は、何気なく安兵衛の日記を手にとり、はじめから読んでみました。

…そして村長は、ページをめくるたびに、ポロポロと涙を流したのであります。

「安兵衛や…。お前の書いたことも言うたことも、全部本当

だったんじゃない…。わしらは、なんてひどいことをおまえに…」

村長は、安兵衛の家を飛び出し、村中へ安兵衛の身の回りで起こっていた本当のことを伝えました。そして急いで風の便りに聞いた安兵衛の住んでいる村へと、手紙と安兵衛の日記を送ったのであります。

【安兵衛よ。これまでのわしらのおまえさんに対する行いを、どうか許してほしい。そして願わくば、もう一度村へ帰ってきてほしい】

安兵衛からの便りは、すぐに届きました。そこにはこう記されていました。

【村長へ。おいら、すぐにでも村へ帰りたいたのですが、道を忘れてしまいました。この手紙が届くころには、きっとおいらは村へたどりつけず、涙を流しているでしょう】

それからしばらくして、安兵衛は笑顔で村へと戻ってまいりました。そして安兵衛が村に帰ってからというもの、イノシシやクマはすっかりあらわれなくなって、安兵衛も村人もずっと幸せに暮らしたのであります。

